令和２年度
第４分科会 研究実践報告

東京都立城南特別支援学校

01　昨年度の研究

▸言語能力の育成に必要な知識の習得

「コミュニケーション環境・プログラム評価表」の活用

学習環境（物理的環境）／教員の関わり方（人的環境）／児童・生徒の理解レベルと授業内容の適合度を評価し、適切な言語環境について知識を習得した。

▸言語発達に関する客観的な実態把握方法の検討

「言語・コミュニケーション発達スケール（LCスケール）」の活用

言語理解・表出に関するおおまかな実態の把握や、言語面の困難さを共通理解でき、本校でも有効活用できることを確認した。

▸実態に即した授業計画・評価・改善方法の検討

「領域別実態リスト」の開発

客観的な実態リストにより、児童・生徒の課題が可視化でき、適切な授業計画や評価に活用できることを確認した。

01　昨年度の研究

►客観的な実態把握（言語発達）の方法の検証

「個別指導のポイントチェックリスト」を用いた実態調査

「個別指導のポイントチェックリスト」中の「身につけたい力、ねらいを決める」「指導内容を決める」部分を共通の指標として実態把握と指導案作成をした。

►「主体的・対話的で深い学び」のある指導の改善

言語活動を充実させるための工夫・改善点をKJ法により分類

①「できる」②「わかる」③「説明する」の３ステップが必要

①興味を抱かせること　②基礎的な知識・技能を学ぶこと　③理解した知識・技能を使って本単元の学習をまとめることが３ステップの基本であると考えた。

02　研究構想

研究の目的（仮説）

各教科指導での言語活動を充実させることによって、児童・生徒がより「主体的・対話的で深い学び」を得られ、資質・能力の向上を図ることができる。

令和2年度の到達目標

〇言語発達等の学習習得状況の実態把握と授業改善方法の検討。

〇言語活動の取り入れ方や学習形態など、言語活動の充実を図るための授業評価・改善の整理。

02　研究構想

取組１　**実態(習得状況)把握の方法の検証と実践**

〇授業導入時に、前回の授業の振り返りを行う。

〇言語活動の習得状況を評価。

〇次回への改善点を検討。

取組２　**研究授業や実態把握に基づく授業改善(言語活動の取り入れ方と学習形態)の検証**

〇研究授業協議を基にした指導方法・教材設定の検討。

〇言語活動を充実させるための授業評価観点表の作成。

03　実践内容

実践１。

- ► 実態把握（習得状況把握）の実施。
- ► 授業者による検証結果の読み取り。

実践２　研究協議会において

- ► 実態把握に関する意見交換・改善点協議。
- ► 外部専門家（助言者）からのアドバイス。

実践３

- ► **言語活動を充実させるための授業評価観点表の作成。**
- ► **授業評価観点表の項目の実施調査。**

04　実践　1　『実態把握（習得状況握）』

◆　習得状況把握表の作成と検証

『授業導入時における前授業の振り返り　小学部』

生徒の答えをもとに
習得状況を評価

導入の場面での「発問」・（方法）	それに対する生徒の答え	評価の視点	評価	次回の授業ではどう改善するか？
		互いの話を集中して聞き、話題に沿って話し合うことができたか？		
		書いたものを読み合い、よいところを見つけて感想を伝え合うことができたか？		
		文章の内容と自分の経験とを結びつけて、自分の思いや考えをまとめ、発表し合うことができたか？		

授業導入時の発問と生徒の答えを記入

生徒の答えをもとに
改善点を考察

『学習指導要領　言語活動を充実させる指導と事例』
を参考に実態把握の項目を設定

04　実践　1　『実態把握（習得状況把）』

◆　習得状況把握表の作成と検証

『授業導入時における前授業の振り返り　中学部』

導入の場面での「発問」・（方法）	それに対する生徒の答え	評価の視点	評価	次回の授業ではどう改善するか？
		主語と述語を明確にして表現できていたか？		
		比較の視点を明確にして表現できたか？		
		判断と理由の関係を明確に表現することができたか？		

『学習指導要領　言語活動を充実させる指導と事例』を参考に実態把握の項目を設定

『１段階』

04　実践　1　『実態把握（習得状況把握）』

◆　習得状況把握表の作成と検証

『授業導入時における前授業の振り返り　高等部』

導入の場面での「発問」・（方法）	それに対する生徒の答え	評価の視点	評価	次回の授業ではどう改善するか？
		判断と根拠、結果と原因の関係を明確にして表現することができたか？		
		条件文で表現することができたか？		
		科学用語や概念を用いて表現することができたか？		

『学習指導要領　言語活動を充実させる指導と事例』を参考に実態把握の項目を設定

『２段階』

04　実践　2　研究授業　研究協議会

●学習効果を高めることができる。（主体的・対話的で深い学びのある）

・言語活動の検証と事例収集を検証。

・言語活動の授業への有効な取り入れ方を検証。

●教員による実態把握からの改善点。

●助言者(木村泰子先生)によるアドバイス

を基に、

『**言語活動を充実させるための授業評価観点表**』の作成へ。

04　実践　3
言語活動を充実させるための授業評価観点表の作成

授業の構成	1	評価できる活動を設定する
	2	自分の考えを表現する場面があるか
	3	自分の考えをワークシートに記入し発表する
	4	口頭で説明を添える
	5	その教材をもとに説明できるような教材であるか
	6	児童が経験から関連ある知識を探り取り、話すことができる授業になっているか
	7	問題意識をもち、知識を使って解決策を見付けていくような授業になっているか
	8	自分の考えをもち、伝えられる授業になっているか
	9	友達の発表を聞き、考えを共有できる授業になっているか
	10	書く以外の作業が入っている

04　実践　3
言語活動を充実させるための授業評価観点表の作成

指導方法	1	板書しながら説明するのではなく、先に提示して話をする（児童・生徒は文字を追うことなく話の聞き取りに集中できる）
	2	知識を利用して、粘り強く考えられる設定を用意する（サクサク導いていないか）
	3	児童生徒が自ら気付くような視覚情報を提示しておく（前回の学習内容を整理したもの）
	4	例示には既習内容を確認する要素を入れるとよい
	5	教師のヒントの言葉で気付くのではなく、既習事項を自分で手繰るような設定をする
	6	生徒と教師が読み合う（会話し合う）方法もある
	7	計画にない、生徒の発言を、単元に関係あるようにしてキャッチ
	8	答えを言って伝えるのではなく、見て読んで探せるようにする
	9	答えを言って教えるのではなく、答えをイメージさせるような言葉掛けをする

04　実践　3
言語活動を充実させるための授業評価観点表の作成

活動内容	1	文章(や図、グラフ)から読み取り、自分の考えとして表現する場面はあるか
	2	考える時間を適切にとっているか
	3	絵を見て言葉、文字に置き換える活動には思考の要素がある
	4	発表し合う

04　実践　3
言語活動を充実させるための授業評価観点表の作成

発問	1	ねらいに沿って児童・生徒が考えるような授業になっているか
	2	生徒に気付かせるような内容になっているか
	3	発問に対し単語で答えたら、もう一度質問し、言い切ったかどうか確認する(単語で答える場合は自信がない場合が多い)。丁寧に話させるように配慮する
教材	1	考えを表現(可視化、文章化等)できる教材か

04　実践　3
言語活動を充実させるための授業評価観点表評価観点項目の実施アンケート

前述した観点表の観点項目について、

すでに実践しているものについては○、必要性を感じているがまだ実践できていないものには×を付けてください。

また、×については理由を書いてください。

と、アンケートを行った。

05　研究成果

成果

〇実践1『授業導入時における前授業の振り返り』で

児童・生徒の**言語能力の習得状況が把握**できた。

〇実践１,2より『**言語活動を充実させるための授業評価観点表**』

を作成できたことで、**授業づくりの観点が明確**になった。

05　研究成果　　〇実践３アンケートより

課題①　発表・考えの共有の場の設定

『授業の構成　９』

・**１人のため難しい。**

『活動内容　４』

・**複数では難しい。**　・**１人で発表する機会はある。**

・**教員が代わりに（児童・生徒と）課題をこなして発表し合えるように工夫。**

・**教員と発表し合う形をとる。**

→次年度の授業で、取り入れて実施していく。

05　研究成果　　〇実践３アンケートより

課題②　教科書・プリント以外のプラス１の教材

『授業の構成　１０』

・マグネット操作で穴埋めする教材を作りたいが、作成する時間が確保できていない。

『指導方法　３』『教材１』

・活動の設定が難しい。　・教科書・ノート以外の視覚情報は用意できていない。

・半具体物やキーワード、ポイントなど、視覚化できるプラス１の教材を。

・前回の授業のまとめでポイントを書き込み、その視覚情報をもとに授業の導入で振り返る。

→時間をかけずに作成しやすい、プラス１の教材を検討し、活用していく。

05　研究成果　　〇実践３アンケートより

課題③　考える時間の設定

『授業の構成　３』

・**記入するのに時間がかかる。**

『活動内容　２』

・**答えはじめるのを待つようにしているが、「わからない」や質問になってしまい、自分でじっくり考える時間の量は十分でないかもしれない。**

『発問　３』

・**進度の都合上、毎回すべての発言に配慮は難しい。**　・**単語での答えを拾って補足している。**

・**いつ、どのように、どのくらい　考える時間を設定するか。**

→次年度の授業で検討していく。

05　研究成果　　〇実践３アンケートより

課題④　ヒントの出し方について

『指導方法　５』

・ついヒントを言ってしまいがち。　・ワークシートにヒントを記載している。

・実際にはヒントを出さざるを得ない場合が多い。　・進み具合、内容による。

『発問　２』

・気付かせようとしているが、実際にはヒントを出してしまうことが多い。

・ヒントの適切な量・タイミングについて。

→課題②のプラス１の教材と兼ね合わせて、次年度の授業で検討。

06　次年度に向けて

今年度の実践を通して、言語発達等の学習習得状況の実態把握と言語活動の充実を図るための授業評価・改善の整理検討をすることができた。

次年度は、アンケート結果に対する改善と言語活動の取り入れ方や学習形態について、PDCAサイクルでの授業改善の実践・検証を通して、より効率的な形を検討し、『言語活動を充実させる授業デザイン』の提案を行えるようにする。